

# 「森と水と命の惑星」国際会議

## ～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

(丸いつながり)

3月10日(日)の第5面には東海文芸 高田一柳会(2月)が掲載されている

お月さま地球を回って七変化

返柳

席題「丸」

円陣を組んで苦難に立ち向かう

お互いに譲歩し合えば円く行き

花一輪部屋の空気がまろくなる

人間に円みがついた頃は老い

丸裸になって二年を無我夢中

返柳

丸裸苦難の部屋に花一輪

お互いに手をかけ創った実人生

返柳

郷の母背を丸くして介護

返柳

DNA息子も孫も団子鼻

返柳

母の背の丸さは子孫の団子鼻

返柳

どの家も丸く明るく照らす月

返柳

地球儀を回すと銃の音がする

返柳

(新沼志保子)

沈黙の語り部にある

る」

3・11の大津波は町や村を二呑みにして去って行った。町や村の集落の歴史の遺跡も流された。「三陸気仙の地名物語⑨」にはそれら地名の「いわれが」述べられていて、いろいろな思いが懐かしく甦って来る。この大津波を経験しなければ、あまり関心をしめさなかったと思われる地名が身にしみて来るのである。

「(砂の文字つく) :」大船渡湾は近世まで「佐狩浦(さかりうら)」と呼ばれていたこともあり、盛岡も海と無縁だったわけでないことが分かる。現在は「みどり町」となっている付近は、すこし前まで「砂土場(さとば)」という地名だった。砂の文字が付いていることは、海か川の近くを意味する」と述べている。

宮古田老地区はその昔、「多老」と表記されていた。津波の恐ろしさを知らない若者は大地震があっても避難しなかった。そのため被害に巻き込まれ、老人ばかり多くなったのでその名が生じたという。今回の大津波では、

平地の少ない気仙地方では広大と思われていた高田町市街地が軒並み浸水した。街区の奥にあった高田高校校舎の3階屋根まで水が達したほどだが、現在の地名は「長砂(ながすか)」と述べている。人間の歴史と自然の歴史はいろいろな物語の中に織り込まれている。一枚の写真は「日本の万里の長城と呼ばれていた、高さ10層の田老防波堤。それでも津波を防ぐことはできず、残されたぬいぐるみ、悲哀を感じさせる」と述べている。まさに、沈黙の語り部である。一秒、一分、一時間、一日、一年と物理学的な時間は流れる。

人間の心には心の時間がある。人間が生きて行くには宇宙、地球、地域の物理学的時間と文化が生み出す心の時間の両方が必要なのである。それをつなげるものは「沈黙を詠んでつなげる」ことである。

(21世紀と国家の役割)

地域新聞である東海新報に世界レベルの大きな問題を持ち出しているのである。何故な

ら、東海新報にはこの問題に対応できる可能性を秘めているからである。「梅下村塾」はこのための火つけ役を果たしているわけである。

幕末の

幕末の不平等条約、戦後の日本国憲法、これら歴史に示されている、欧米諸国からの重い軛をどう乗り越えるのか。日本の国会のテレビ報道、新聞報道、などから、弱小政党の軽い発言と行動、政権政党の権益の縛り、まさに現代の劇場型政治の一面である。

3月15日(金)の産経新聞の第一面に「転換への挑戦 元首相中曽根康弘 憲法の可能性を活かせ」と安倍晋三首相への提言が掲載されている。「安倍首相は先日、日本の集団安全保障への参加に言及し、そのための憲法9条の改正にも前向きな姿勢を示した。しかし、憲法改正には相当のエネルギーを要する。結局のところ、自身の希望が本音を漏らしただけで終わってしまう。首相には、ときには憲法解釈をあえて逸脱するような独自の解釈を断行するだけの政治行動が求められる。…」と述べている。

第二次世界大戦での敗戦と米国のマッカーサー総司令官のもとで制定された日本国憲法には、日本の国際的政治活動を抑制しようとする、思惑があったことは世界の他の国の憲法と比較すると明白である。重い軛が付けられているのである。

「誰か知ろう尺々下の水の深さを、その水の心を」と結んでいる。東日本大震災で大きな被害を被った気仙地方は世界が感動したその忍耐力の底から世界に向けて、尺々下の水の心と文化の心を発信する時が来ていることを認識すべきである。東海新報、梅下村塾に期待するものが大きい。

(東海新報記事から)

3月12日(火)は3・11の記念行事のニュースで東海新報はいっぱいである。報道されている活動はどれも生き

生きとしている。第5面に投稿「我慢、復興、そして飛躍 一関市名村栄治」が掲載されている。遭遇している困難が深いほど、これ乗り越えるための縁(よすが)が求められるのである。「最初の10年は我慢のとき。次の10年は飛躍のとき」と述べられている。10年を一区切りと捉える見方に、肯けるものがある。同じ5面に東海文芸 詩 宝くじを買おう 田端五百子(あかね詩会)が掲載されている。「初詣におみくじを引いた。あなたの運勢は「小吉」運はだんだん上向くと書いてあった…宝くじ当たるも当たらずも運のうちなら 上向く運を試しにと首をすくめて夕べの街へでる——」この詩は、目の前の運命を乗り越える縁(よすが)をさがし、それを感じ取れば、元気になることである。この縁(よすが)は地域の文化から生まれて来るものであることを(東海新報記事から)受け取った。